

地域イベント支援プロジェクトのダブル展開 によって得られる教育の質的改善

Qualitative Improvement of Education Obtained by Double Development of Support Project at the Regional Event

山本 耕司¹⁾, 鈴木 直美¹⁾, 池本 有里¹⁾, 児島 知樹¹⁾, 三木 歩²⁾
Kohji YAMAMOTO, Naomi SUZUKI, Yuri IKEMOTO, Tomoki KOJIMA, Ayumu MIKI

四国大学¹⁾, 株式会社丸昌²⁾
Shikoku University, Marusho Co., Ltd.
Email: kyamamoto1121@gmail.com

あらまし：PBL（プロジェクトベースドラーニング）は学生が主体的な学びを実践する上で有効な教育手段である。徳島県勝浦町坂本では、坂道を活かしたマラソン大会を住民が主催して実施しているが、その住民団体を助け、大会をPRする授業をPBLで行った。しかし、住民団体との信頼関係構築に授業時間だけでは十分ではなく、PBLの展開が難しい。そこで、もう一つのPBLを縦横に展開し、住民との繋がりや情報発信で成果を上げた。これにより、本来のPBLにおいても質的改善がみられた。

キーワード：PBL, 映像制作, ライブ中継, ダブル展開

1. はじめに

近年、多くの大学で社会人基礎力を培う教育方法が検討され、学生自らが考えて行動し、課題解決していくプロジェクト型教育プログラム（PBL）が取り入れられている。山口は、こうした大学におけるPBL研究の動向を整理し、その特徴や課題をまとめている¹⁾。筆者らも、ゼミや演習科目を通じたPBLを実践し、種々の課題に対して様々な解決策を探ってきた。それらを総合的に昇華させ、2012年からはメディアプロジェクト演習という名称のPBL授業をコース必修科目として実施している。この科目は学生が所属するコースの学習を通じて積み重ねてきた専門の知識や技術を用い、創造性と協調性を養いながら、やり遂げる力と達成感を得ることができる。学生は、当該科目を通じて地域社会に目を向け、実行可能な地域課題を見つけ、ICTを活用した解決策を提案し、具体的に実施して成果を出す。本取り組みは地域社会からも一定の評価が得られ、成果も期待されるようになった。学生は、自身の達成度以上に依頼者の満足度をどう高めるかを考え、コストを抑えクライアントに最大限の利益を提供することを考えるPBLとなってきた。

今回は高齢化の進む山間部で、地域住民が自ら運営するマラソン大会を成功させるPBLを行う。

2. 本取組みの経緯

徳島県勝浦町と筆者が所属する大学が連携協定を締結していることから、勝浦町坂本地区の住民団体「さかもと元気ネットワーク」から坂道マラソンを手伝ってほしいと依頼されたのがきっかけである。このみかん畑の中の坂道を駆け巡るマラソン大会には、全国から500人ほどが参加する。参加ランナーの個々のタイムはICタグを利用して測定され、速報としてネット掲載も簡単にできるが、スタッフだけ

では不可能な要望をどう解決するか、考えることとなった。それは、

- 1) タイムだけでなく参加者の参加している姿の動画を撮って証として提供したい
 - 2) 応援するボランティアたちも大会に参加している実感が得られるようにしたい
 - 3) スタート、ゴールだけでなく、山あいの坂道を走っている姿を残したい
 - 4) 地域をあげて参加者をもてなし、喜んでもらっている雰囲気を全国に伝えたい
- などである。

これらの要望には授業で取り組めるものとそうでないものがある。教員も地元住民との十分なコミュニケーションがとれていなければ、円滑な授業展開が望めない。そこで、授業を通じて課題解決しようとするチームと、授業とは別に坂本地区へ通って住民の準備活動に積極的に入ったり、事前に広域的にPRするとともに本番にはライブ中継を行ったりして、円滑なプロジェクトの実行ができるように動く別働チームを作った。

3. 本取組みの実践

3.1 プロジェクト演習の授業を通じて

授業で参加する21名の学生は、6つの班にチーム編成した。そして、本番当日にはコースのポイントに班毎に配置してビデオ撮影を行った。これらプロジェクト演習の履修学生は、本番までの毎週の授業時に、どこをどう捉えて撮影するかを机上で検討し、ロケハンを経験した上で、授業に参加してもらっている住民団体の代表者に対して撮影計画をプレゼンした。住民団体の代表者からは、さらにより撮影ポイントや撮っておいてほしいものの要望が出され、地元民ならでわの視点を織り込んだものになった。



図1 授業に参加する住民団体の代表者たち



図2 ロケハン



図3 ロケハン後の学生と住民たち

3.1 「さかもと坂道マラソン」とは

さかもと坂道マラソンは、11月後半に開催される。距離別に4コースから成り、最短コースは全長1kmで標高差23m、次に全長2.9km 標高差79m、さらに全長6km 標高差141mのコース、最後に全長9.8km 標高差224mのコースである。2回目となる今回は、全国から500人ほどランナーが参加し、普段は人影のほとんどない過疎の集落に大いに活気が漲る。市民マラソンの多くは自治体主導で行われるが、住民同士が協力あって行う珍しい取り組みである。そこには地域愛に溢れる住民の熱意がある。

3.2 要望の解決方法

2. で挙げた住民団体からの要望の解決策として、学生チーム6班分を主要ポイントに配置したことで、1) 3) を解決するとともに、別働学生チームによるPBLを縦横に展開した。このチームは上級生5名で構成した。まず①ゴールと表彰式をライブ中継。②ゴールに入るランナーをギャラリーで応援する人や裏方で活躍するボランティアスタッフの撮影。③優勝者や高齢者など特徴ある人をインタビュー。④沿道で手をふったり声をかけたりする地元の高齢者の人たちの笑顔の撮影。⑤最も長いコースの途中にある民家の軒下から走り抜けるランナーをライブ中継する。という役割を行った。ライブ中継は全国どこでもスマホなどで音とともに見ることができ、参加者の家族がネットで応援することも、駐車場係やコース途中の給水所でボランティア活動するスタッフも今どうなっているかを確認できるため、2) 4) といった要望の解決も行うことができた。

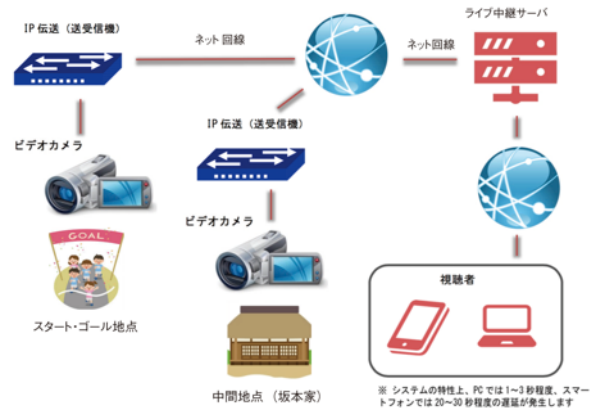


図4 ライブ中継のIP伝送によるネット配信



図5 優勝者へのインタビュー

4. 本取組みの成果

2つのPBLを同時に展開することによって、参加者の高い満足度を得て住民団体の高評価に繋がり、マラソン大会を成功に導いた。コンペティションの調査やループリックによる評価結果から、本PBLのダブル展開は教育の質改善に十分な成果を示したと考えられる。



図6 学生による班ごとの映像作品

参考文献

- (1) 山口泰史, 2017. わが国における PBL 研究の動向-大学教育での実践を中心に-, 日本地域政策学会 19: 34-41.